

土佐日記の「地理の誤り」について

松 村 誠 一

(文理学部国語学国文学研究室)

On So-Called “Geographical Errors” in the Tosa-Nikki

Seiichi MATSUMURA

I

土佐日記の地理上の記述に疑問があることは山田孝雄氏の「土佐日記に地理の誤るか」(『文学』第3巻 第1号 昭和10年1月)という有名な論文によって広く知られている。そこでは、山田氏は主として「たな川」と「なだ」とについて述べ、この二つの地名が誤って入れかわっているのは、旅行者がいちどくらい通過した程度の土地のことは記憶が不十分で、その際の手控えが十分でないとした錯誤が起こりやすいからであるとしていられる。

萩谷朴氏は上記の「たな川」「なだ」のほか「土佐の泊り」「曲がりの泊り」「男山」についても疑問があるとし、それらの原因は作者が老齢のための記憶違いとか地理不案内とかではなく、別の何らかの創作意図をもっての擬装であると考えていられる。(『土佐日記新釈』 要書房 昭和29年)

これに対して三谷栄一氏は、「土佐の泊り」と「男山」とについては作者が自分自身を隠そうとしていることを認められたが、「たな川」と「なだ」とについては土佐日記の原典になったメモが具注暦に書き留められていて、一月二十九日・三十日・二月一日の条は記事が多くて具注暦のわずかなスペースに納まらず、裏書にした部分があって、それをもととして日記を書くとき錯覚を起こしたものであらうと考えていられる。(『土佐日記』 角川文庫 昭和35年)

II

山田氏は上にあげた論文の中で、貫之は一月二十一日に室津を出て、二十九日に土佐の泊りに着くまでの間に三カ所に泊まっているが、土佐日記にはその地名をあげていないことに触れて、その地名をあげても効果がすくないからか、その地名を控えておかなかったからか、その地名があとからわからなくなったからか、この三つのうちの一つがその理由であらうとされたが、それ以外の地名については何らの疑いも示されなかった。

ところが、最近、これらのほかにも地名の上で疑問とすべき点があるという説を出されたのが久保田博氏である。(『室戸町誌』 室戸市立図書館室戸町史跡保存会 昭和37年12月。および「土佐日記に於ける御崎の泊について」と題する孔版7ページの論文。)

久保田氏は次のように考えていられる。貫之は一月十七日の暁に室津(久保田氏は土佐日記の「室津」を通説の津呂ではなく、現在の室戸市室津とされる。)から舟をこぎ出したが、夜のように明るくなるころ、船頭が「黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。み舟かへしてむ。」といって舟をかえたのは、もとの室津へではなく、室戸崎を東へ回ったところにある御蔵洞(みくらどう。空海が難行苦行した所と伝えられている。)のあたりにあった舟泊り「御崎の泊り」(ビシャコ巖の付近)であらうというのである。

久保田氏がその理由としてあげられる諸点のうち、重要なのは次の三点である。

(1) 一月十七日の「黒き雲にはかに出で来ぬ。」は前線が張り出して来たことで、つづいて北西

の季節風が吹き出すと、室津の泊りはまっ白くなるほど荒波が立つが、御崎を越えると季節風は北の山にさえぎられて、沖には波が立っても海岸沿いは波は静かである。従ってわざわざ波の荒れ狂う室津へこぎ帰ることは考えられない。

(2) 一月十八日の記事に「この泊り、遠く見れども近く見れども、いとおもしろし。」とあるが、十一日以来室津に泊まっていたとしたら、こんなに驚いたようなことを書く必要はない。この表現は「御崎の泊り」に泊まって、室戸崎の景色のことを書いているものと考えるのが適当である。

(3) 一月二十日の記事に「二十日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。」とあり、また「都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」とあるが、東に山を控えた室津では海の中から出る月など見ることはできない。月が波から出て波に入る雄大な大景は、室戸崎の近くでなくては見られないところである。

久保田氏の説の要点は以上のようなものであるが、氏は室戸市室津の出身で、多年室戸中学校長を勤められた人、現地のことはだれよりも詳しい。私自身も高知市に二十数年住み、土佐日記の跡は数えきれないほど歩いているから、久保田氏の指摘された点は非常に重要なことであることがよくわかる。何よりもまず強く心をひかれたのは北西の季節風についてであり、それは自分自身の体験に照らしてのことであった。私の体験は浦戸湾内でのことであるが、つり舟を出してこの季節風にあい、平常に数倍する驚くほどの時間と労力とを要して北上したのであった。久保田氏のいわれるように、激しい北西の季節風にまともに向かって、室戸崎方面から室津へこぎ帰るなどということは、実際にはありえないことではないかと考えられる。貫之の舟は御崎を越えるあたりまで進んでいて、久保田氏のいわれるように御崎をわずかに東に回ったところにある「御崎の泊り」にこぎかえたものとみることは誤っていないと思われる。

しかし、現地での生活を通じて提出されたこの久保田氏の説に最も興味を感じたのは、そういう事実だけにとどまるのではなく、かねがね土佐日記の構成について私の考えていたことが、この久保田氏の説によって力づけられることになったからである。

III

土佐日記をくりかえし読んでみると、出発してからの日数を数える記事が、二か所にかたまって出てくるということに気づくであろう。

(1) 一月十五日

「口惜しく、なほ日の悪しければ、ゐざるほどにぞ、けふ二十日あまり経ぬる。いたづらに日を経れば、人々海をながめつつぞある。」

一月十六日

「さて、舟にのりし日よりけふまでに、二十日あまり五日になりけり。」

一月二十日

「きのふのやうなれば舟出ださず。みな人々うれへなげく。苦しく心もとなければ、ただ日の経ぬる数を、けふいくか、二十日、三十日と数ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。」

(2) 一月三十日

「けふ、舟にのりし日より数ふれば、みそかあまり九日になりけり。」

二月一日

「また舟君のいはく、この月までなりぬることとなげきて、くるしきにたへずして、……」

さらに気のつくことは、(1)のところでも(2)のところでも、それ以前に長い間「いつしか」と待

ち望んでいたことが実現しているということである。すなわち、(1)では室戸崎を東に回ることであり、(2)では阿波の水門をわたることである。

(1) 一月十一日の夜からむなしく室津に泊まり重ねていて、旅程のはかどらないことでいらだたしい思いをしている。十六日には、「風波やまねば、なほ同じところにとまれり、ただ海に波なくして、いつしか御崎といふところわたらむとのみなむ思ふ。」とっていて、室戸崎を回ることが旅程の中の一つの大きな区切りとして「いつしか」と待ち望まれていることがわかる。日数を数えて、はかどらぬ旅程にうんざりするのはこの時である。一月二十一日になって、長い間の希望がようやく実現した。室津を出て、御崎を回ってしまうことができた。室戸崎を東に回ること、それまで悩まされてつづけていた風波、ことに北西の季節風の恐ろしさからひとまずのがれることのできた思いがするのである。

(2) 室戸崎を東に回って、風波はそれまでのようではないにしても、まだときどき舟を出せないような日がある。しかしそれにも増して悩みの種となるのは、海賊のことである。今度はたとい風波の無い日であっても簡単には舟は出せない。海賊の出そうにない時をねらってでなければ舟は出せないのである。和泉国へ行ってしまえば海賊のおそれもない。阿波の水門を早くわたることは、室戸崎を回って海賊をおそれ始めてからの毎日の、いちばん大きな望みである。一月二十六日には「このあひだに、風のよければ、かちとりいたく誇りて、舟に帆上げなどよろこぶ。その音を聞き、童もおむなも、いつしかと思へばにやあらむ、いたくよろこぶ。」といている。「いつしか」と待ちこがれているのである。そうして、一月三十日になってそれがやっと実現したのであった。日数を数えて出発以来三十九日もかかっていることを確かめてみるのも、その時のほっとした気持ちからであるし、二月一日に、この月までかかったとなげくのも、それを回想してのことである。

このように見てくると、土佐日記では、御崎をわたるということと、阿波の水門をわたるということが、一つの大きな区切りとされていることがわかる。しかも、そのいずれもが、それまでおさえにおさえられていて、待ちこがれていたところで、好機をつかんで一気に実現したことになっている。

久保田氏がいわれるように、現地の地理的・気象的条件からみて、一月十七日に室津を出て、にわかには黒雲が出た、風が吹き出すというのでもとの室津へこぎ帰ったということは事実としては無理であるから、「御崎の泊り」という港に泊まったと考えるとするとどうなるであろうか。

十七日には室津を出て「御崎の泊り」に泊まる。二十一日にここから舟を出して、某泊りの一（高知県安芸郡東洋町甲浦か、徳島県海部郡穴喰町か。）に泊まるということになる。この場合には、室戸崎を一気に回って北上することにはならない。そこで考えられることは、作者は室津を出て一気に室戸崎を回り、甲浦あたりまで行ったことにしなければならないという、創作上の何らかの理由をもっているのではないかということである。阿波の水門を一気にこぎわたったのと同じように、室戸崎も一気にこぎ回ってしまうことにしなければならない、何らかの理由があるのではないかということである。

地理上の事実とは違った記述は他の部分にも見られるのであるから、このところで、何らかの理由があって、地理上の事実をことさら曲げてしているのではないかと仮定してみることも、許されないことではない。

IV

土佐日記が、事実に忠実な旅行記とか紀行文とかいうものではなく、構成的な創作であると考え、る説は、もはや通説となっているといってもよからう。樋口寛氏・萩谷朴氏・石川徹氏によって指

描されているように⁽¹⁾、あるいは戯曲的構成をもち、あるいは小説の世界に属せしめてよいような点をもっているのである。

貫之が何を主題としたかということは必ずしも明らかではないが、萩谷朴氏が指摘されるようないくつかの主題が考えられる⁽²⁾。そのような主題を展開するために、貫之はどんな構成を試みたのであろうか。

土佐日記の構成は三部から成ると考えられる。第一部は十二月二十一日から一月二日まで、第二部は一月三日から二月五日まで、第三部は二月六日から二月十六日までである。これら三部のそれぞれに、ある背景のもとに起こる事件を通じて、貫之のねらった主題が展開されているものと考えられる。

第一部は「住む館」を出ることに始まり、大湊に泊まっているところで終わる。背景となっているのは、大津付近・大津から浦戸までの湾内・浦戸から湾外に出て大湊までの海上と大湊の泊りである。湾外に出たといってもまだあまり風波にさまたげられることもなく、一見のどかな船旅である。後任の守・その兄弟・講師・国人たちが別れを惜しんで連日の酒宴。ある者はあとを追って、鹿児島や大湊にまでも送りに来る。これらの人々との接触が第一部のおもなできごとである。

第二部は大湊に泊まり重ねていることから始まり、淀川の川口の「みをつくし」のもとに至るまでで終わる。背景となっているのは風波の荒い外海である。風波にさまたげられて幾日も同じ港に泊まらなければならないことがたびたび起こる。貫之の一行の人々以外の人といえは「かちとり」がいるだけである。「かちとり」の言動がしばしば関心の的となる。風波を気にして、旅程のはかどらぬ単調な日が続く。海辺の風景や風波に関する歌が、一行の人々によって作られる。外海と風波という自然に拘束された船旅の生活である。一月二十一日から三十日までの間は、その自然の拘束に加えて、海賊の恐れがある。防ぎようのないことでは、風波と異なることのないこの海賊の恐れは、風波だけを恐れていた船中の単調な生活に、別種の恐怖と緊張とを与えて、単調な生活を極度に刺激したが、それも十日間で終わった。その日からまた二月五日まで、淀川の川口をまぢかにして、なお風波の日が続く。船旅が終りに近づくにつれて、ますます「かちとり」の言動が目だつ。

第三部は「みをつくし」のところに始まり、久しぶりにわが家に帰り着くところで終わる。淀川をさかのぼり、上陸して車で京に入る。船の中の、外界から隔絶された生活を終わり、都の近くから一行以外の人々との接触が始まる。土佐にいた間のわが家の荒れ方のひどさに驚く。

このように三部に構成された背景とできごとの上に、どのような主題が展開されているであろうか。

土佐で失った子に対する追憶は、貫之の心を土佐へ引きもどす。任期を終わった国司の心は、宮廷と中央官庁と貴族社会とわがふるさとのある京へ飛ぶ。この二つの心のたたかいが、貫之のとりあげた主題の一つであったことは確かであろう。第一部でも第二部でも第三部でも、全篇を通じて亡児の追憶と望郷の情とはとりあげられており、第三部の終りのところで、二首の歌がこれをしめくくっている。萩谷氏のいわれる「自照」である。

第一部では別れを惜しむ人々の行動を通して、国人に対する批判を展開し、第二部では航海の全

(1) 樋口 寛 「土佐日記に於ける貫之の立場」 (日本文学懇話会編『古典文学の探究』 成武堂 昭和18年6月)

萩谷 朴 「土佐日記は歌論書か」 (『国語と国文学』 第25巻 第6号 昭和23年6月)

石川 徹 「土佐日記に於ける虚構の意義」 (中部国文学会編『国文学の新研究』 愛知書院 昭和25年7月。のち、石川 徹 『古代小説史稿』 刀江書院 昭和33年5月に再録。)

これらの諸説のもつ意義については、木村正中「土佐日記の構造」(『文芸研究』第10号 明治大学文芸研究会 昭和38年3月)参照。

(2) 萩谷 朴 「土佐日記創作の功利的効用」 (『国語と国文学』 第40巻 第10号 昭和38年10月)に従来の自説の発展のあとをふりかえり、最終的な見解が述べられている。

権をにぎる「かちとり」の言動に批判の目を向け、第三部では、帰京を迎える人々や留守を頼んだ人の行動の上に鋭い批判のこぼれを投げかける。萩谷氏のいわれる「諷刺」である。第二部の一月九日にも国人に対する批判が見られるが、これは大湊を出る時までなおたずねて来るこの人々の好意を強調したもので、国人に対する批判は主として第一部に配しているといえることができる。

第二部では、海辺の風景や風波に関してよまれた歌にもとづいて「歌論」を展開する。萩谷氏の指摘されたところである。第一部の十二月二十七日、第三部の二月七日・九日にも歌論が見えるが、歌論が主として述べられているのは第二部である。

V

このように、土佐日記の構成を三部から成るものとみた場合に、第二部は外部の社会との接触のほとんど無い、外海上の船中の世界である。前に述べたように単調な日のくりかえしで、しかも日数は第一部・第三部がそれぞれ11日であるのにくらべて33日と非常に長い。

貫之は、このような長くて単調な第二部に主として「歌論」という主題を展開した。しかもそのねらいが、萩谷氏のいわれるように年少初心者にあったとすれば⁽³⁾、この第二部の単調さに飽き飽きされては困るのである。外海と風波だけの日々といった背景には、何らかの変化が与えられなければならない。

「海賊」は、この第二部の構成上の単調さを破るためには絶好の事件であったのである。それは主題には何の関係ももたないのである。第二部でよまれている多くの歌の中に、海賊に関する歌が一首もないのはそのためであるといっておく。

一月三十日に阿波の水門を一気にわたることによって「海賊」の出没する部分（第二部第二段）とそのあとの部分（第二部第三段）とははっきりと区切りをつけた作者は、第二部第一段と第二段との間にも、同じような、はっきりとした区切りをつけなければならなかった。そうすることによって、前後にきわだった区切りをもつ第二段が第二部の単調さの中で目だった部分となることができるのである。

一月十七日に室津を出て「御崎の泊り」に泊まり、一月二十一日にそこから北上して土佐・阿波の国境に近い某泊りの一に泊まるというのが貫之帰京の際の事実であろうと考えられるが、それよりも、一月十一日から一月二十日まで室津に泊まっていた、「いつしか」という気持ちをいやが上にも高まらせておいて、一月二十一日に一気に御崎を回って北上したことにした方が、はるかに第二段の「海賊」の部分強く印象づけ、第二部に三つの段の変化をもたせるのに最も効果的であるといえよう。

具注暦に書き留めておいた帰京途中のメモをもとにして土佐日記という一作品を創作したとき、こういった計算にもとづいて、貫之があえて地理上の事実を曲げたものであろうと考えることはできないであろうか。

(昭和39年9月30日受理)

(3) 註(2)参照。

この小考をまとめるについては、筆者の質問に答えて久保田博氏が、現地のこまかな調査をしてくださった。ここにあつく謝意を表する。

